

秋のころに筑波大で行われた新学術全体会議の飲み会で、恩田先生から「今度 IAEA の会議があるけど来る？」と聞かれて「行きます行きます。」と軽く答えた私は、まさか実際にオーストリアにある IAEA の本部 Vienna International Center (VIC) に行くことになるとは当時思わなかった。

ヨーロッパに来たのは私にとって今回が初めてである。乗り換えも含め 16 時間のフライトでオーストリアについたのは現地時間の朝の 9 時。空港では恩田先生が迎えにきてくれた。バスに乗って先にホテルに荷物をあずけて、初日はチェックインまで時間があったし天気もよかったので観光に出かけた。オーストリアでの移動は主に地下鉄であり、回数券を買えばその一日は乗り降りし放題だったので、とくに苦勞せずにオーストリアを観光することができた。

次の日は月曜日、いよいよ初めての IAEA に入る日である。IAEA に入る為には空港と同じ荷物検査を通ったあと、写真入りの入構カードを発行してもらう必要がある。カードをかざしゲートをくぐると、がらんとした空間が広がっていた。理想的な条件は、フラグポールに連盟国の旗がたなびき、噴水が上がっているのだろうが、冬だからかそういった風景は見受けられなかった。回転扉を通して IAEA の会議棟に入った。建物のなかは広くシンプルな作りにな



Vienna International Center

っている。その空間をいろんな人種が通り過ぎていく。このような風景は日本では見られない。しかしなぜか私はこの環境にすぐに対応できた、そのせいか、なぜ日本は日本人ばかりなのか（当たり前だが）、ふと不思議に思った。置かれているスクリーンにはその日の会議の予定が流れていたが、映画のエンドロールのように途切れることはない。原子力という分野を一つとっても、世界ではこんなにも活発に意見が交わされていることに気づかされ驚いた。

会議室に入ると、コの字にテーブルがセットされていた。自分の名札をみつけ席についた。私は今まで、大学街の定食屋でサークルの運営会議をしたことはあったが、このような本格的な会議に参加したことはなく、いつ自分がネームプレート付きの会議に参加できるのだろうかと考えた。今回はオブザーバーとしての参加であり発言することはないが、

いつか自分が物事を決めるために発言する機会があるかどうかについて考えると面白い。

今回の会議のテーマは「原子力事故緊急時における食物・農業分野の対応」である。参加者の国籍は中国・ロシア・ウクライナ・インド・モロッコ・スペイン・ベルギー・マケドニア・フランスそして日本であった。そして国籍不詳の IAEA の職員たちだ。初日はまず会議の目的を主催者が話し、そして各参加者が発表を行っていく。さすがに IAEA の職員および他の国際機関の職員の英語は、発音が正確で聞き取りやすい。しかし、他の人はそうもいかない。インドの方はすごい勢いで英語を押し出して行くし、中国の方の英語は強調が多く攻撃的であった。さらにロシアの方の英語はノンストップであるうえに単語の語尾にロシア語ならではの発音をときに挟んでくるから、私の耳は混乱した。国際的な会議ではただ英語ができるだけでなく、いろんな英語にしっかりと対応する力を必要とすることを痛感した。私の英語力に関して言えば、聞く分には問題がないものの、やはり分からない単語が一つ出てしまうとその文の意味がおぼろげになってしまう。話す面では相手方の意味の取り間違えこそなかったものの、やはり将来にこのような場でやり合うのなら、流暢さ・語彙やらユーモアやらも求められるだろう。最終的に軽い報告書を出すには、書く力も必要だ。まだ続く学生生活のうちにできるだけ高めて行こうと思った。

会議は 5 日間の予定だが初日と二日目は各国の参加者の発表を聞き、3 日目にいよいよ会議が始まった。会議のより詳細なテーマは、緊急事故時にどのように放射能測定をし、データをまとめ、そして、たとえば食料規制の判断をする者や、市民のためにデータをわかりやすくみせるか、についてである。なぜこのようなテーマなのかはおそらく主催者の個人的な経験によると推測される。主催者の Gerd さんは事故後に福島に現地入りし、ずっと汚染状況の情報を



会議の様子

を IAEA に一年間送り続けたようだ。そのときに、見慣れない地名が羅列された役所が出す資料を読んで英語に翻訳した。その資料を見せてみせてもらったが、大型スクリーンに映し出しても何が書いてあるかわからないほど小さい文字で書かれていた。このような見る人の気持ちをまったく考えずに、ただただデータを並べただけの資料では、見る人が正しい判断を下せない。どの地域がどれぐらい汚染されていて、そこではどのような耕作をしているのか、誰がみてもはっきりとわかる地図をすぐに作成できるシステムが必要だ。主催者はきっと翻訳作業をしながら思ったのだろう。

三日間を通して会議の進み方をみていくつか感想がある。まず、今回のテーマに携わる専門家を世界から集めたからといって、会議が順調に進むとは限らないということだ。むしろ様々なバックグラウンドの人を集めたために、それぞれが意思疎通し歩み寄るのに時

間がかかった。たとえば私が放射性核種の土壌内における移行の専門家として会議に参加したとしよう。おそらくそれほど発言をすることはできず、聞き役に徹することが多いだろう。どのようなサンプリングしどの核種を測定すべきか、どこで放射能を定量しどこにデータを送るか、わずかな測定データでどのように広い地域の汚染状況を評価するか、どのような形で汚染状況を表すか、食品の規制値をどのように決めるかなど、一人の専門家では対応できない多くの問題を考えなくてはいけない。また会議の報告書を作成するのではなく、世界のどの地域でも働くシステムを作るとなると、それぞれの地域ならではの技術的な問題もあるだろう。今回の会議は5年計画の最初の会議であり、それぞれが問題点を挙げていくのが目的であるが、後の会議ではどのようなコンセンサスが得られていくのかは興味深い。

今回のような会議が行われたのは福島第一原子力発電所事故が起きたからである。私は2011年の6月の文部科学省主催の土壌サンプリング計画に学生ながらも当初から携わっていた。個人的にはもう2年以上も前のことで立派な汚染地図もできたことだし、ある程度終わった話と思っていたが、そうではなかった。IAEAの会議ではそのときの教訓について日本側はたびたび聞かれた。あのときに行った汚染調査のフィードバックはまだ世界には届いていなかった（IAEAを「世界」というのは語弊があるが）。そして私は不思議に思った。なぜIAEAのGerdさんの主導でこのような会議が開かれているのか、なぜ事故の当事者の日本が先導して考えないのかと。原子力事故が起きてしまったのはもう仕方ないことだし、現在も人々が懸命に除染や廃炉に携わっている。大切なことである。しかし、事故初期の対応は、テレビから見ていた人たちからおろそかであったのに、それを反省し改良しようとした努力はあったのか。原子力事故がまた起きたときに同じ轍を踏まないように、日本国内で考え、そして世界に訴えかけていくべきではないのか。もちろん私の知らないところで事が進んでいる可能性はある。しかし、そのような原子力の専門家だけでは作れないシステムを作るとしたら、より広く公募し様々な人の意見を集める必要があるだろう。次回の会議は2015年に日本の福島で開催されるとのこと。悲惨な原子力事故を経験し、そこから反省や学びを得た日本の人たちが参加していることを私は願う。

会議以外のIAEAでの生活についても述べておきたい。まず、コービーブレイクがある。会議がだいたい8時間から始まって10:00~10:30で30分ほどのコービーブレイクが入る。みんな会議室から離れて、チェーンの喫茶店よりもお得なコーヒーを購入して飲む。この時間のコービーショップは並ぶほど込んでいて、他の会議でも同じようなコービーブレイクが取られていることが伺える。次に昼食である。会議期間中は昼食を外に食べにいかずに、もっぱらVICのなかにある共同食堂で食べた。ここはさすが国連機関というべきか、日替わりで世界各国の料理を食べることができる。また、ベジタリアン向けに大きなサラダが用意され、寿司やケーキ類も充実していた。オーストリアに出かけるまえに友達に、あちらの食べ物は飽きると忠告を受けたが、このIAEA食堂のおかげで食事に不満をいなくことはなかった。また、会議ではいつも同じメンバーだが、この食堂では職員みんなが

昼食をとっているため、多種多様な人種が入り乱れてそれは賑やかであった。会議室よりもこの食堂のほうが、自分が国連機関に来たのだと実感できた。IAEA ないにはお土産屋さんもあり、私は T シャツ(M サイズ)を購入した。帰ってみてきたところ、サイズは日本のよりも一回り大きくぶかぶかであった。購入の際には1サイズ小さいものを買うことをお勧めする。



コーヒーブレイクと昼食の様子

私は学術的にも、福島に関する実務においても特別なにかをしたわけではない。それゆえ今回の会議にはオブザーバーとして参加しているために発言はできず、本当にただ会議を眺めているだけであった。私はまだ学生の身分で実務の経験が少なく、世界観や話す内容がほとんど書籍からきている。そのような私が、専門家たちが自分たちの経験を出し合うことで物事が決まっていく会議場においても仕方ないことを強く感じた（逆に気が楽ということでもある）。日本に帰って自分の手で出来ることをしっかりやろうと心に決めた。しかしそれでも、世界はどうなっているのか、なにが決められているのかを自分の五感で感じる事ができたのは素晴らしい経験だと、この報告書を書きながら改めて思う。このようなことを経験する機会を与えてくださった恩田先生には感謝してもし尽くせない。また、ともに会議に参加しさまざまなアドバイスをくださった JAEA の斉藤公明様、武宮博様にもこの場を借りて感謝の意を表明したい。

張 子見